

追悼文

生瀬先生の思い出

佐 藤 啓 子

ご連絡しなくては。でも体調が悪いのなら、邪魔してはいけないし。そんなことを思い、電話をかけようか手紙を書こうかと逡巡しているうちに、あつという間に生瀬先生はいなくなっていました。

きっと、私が桃山学院大学法学部に奉職するにあたって、「どんなやつなんだか」と思っておられたに違いありません。実際、この大学に奉職して、人からは同じ障害者という括りで見られることもありましたが、私と生瀬先生は、まったく違った人生を歩んできました。しかし、そのような私に対しても、生瀬先生は温かく接してくださいました。

もっとも、赴任してからの1年は、挨拶以上はまったく話をしたことがありません。最初の交流は、法学部の講義に障害者学生を迎えるにあたり、人権委員会の委員長である生瀬先生が私に基本的な情報を与え、見守ってくださいましたことです。障害者を受け入れるということはもちろん彼らを特別扱いすることではありませんが、彼らに特別な不利がないようにするためには、基本的な知識が必要であると考えました。しかし、私にはそのような素養がまったくありませんでした。当時私は1回生春学期の講義・演習を担当していましたから、先行する講義担当教員から情報をお願いするわけにもいきません。学生にとって最初の一ヶ月はその後の3年11ヶ月を左右する重要な期間です。通常の障害者なら知っていそうなこともまったく知らない私にとって、独自のルートでリサーチされた医学的な情報や高校の様子を、授業に必要十分な範囲で知らせてくださる生瀬先生は、ひたすらありがたい存在でした。もちろん全学の障害者の一人ひとりに目を配った上でのことです。学年

の最初には大学の隅々まで走り回って、さまざまなタイプの障害者にとって不都合な点を頭の中でリストアップしておられたようです。法学部の何人かだけでもへとへとになりそうな私にとっては想像を超える気遣いでした。

私が生瀬先生を頼っている割には、ゆっくり話したことはありません。生瀬先生はアルコールの入る学外での法学部行事には参加なさいませんでしたし、私自身には研究室の移動があったりしてあまりお招きできる状態ではなく、またお姿は見かけてもお声をかけてよいものやらと思うこともありました。2年目以降も、立ち話以上のことは内心お互い避けていたのかもしれませんが。ただし、話さえ始めれば、かならず情報交換という名の情報提供と、励ましと、そして、二次障害を起こさないようにという心配のお言葉をいただいていた。そう、障害者には二次障害はつきものですが、私が本学に赴任する前、二次障害を起こす前の生瀬先生を私は知りません。そして、一つ健康上の問題が起きると思いがけない困難も生じる、これも、障害者にはよくあることです。

先生ご自身は

「教室で失敗してコケた」

と軽くおっしゃっておられましたが、そんな軽いものではないからこそ、治療に行くのもためらわれているのではないかと危惧を抱いていました。そのような危惧は、当たってほしくなかった。それでも、生瀬先生から学生の件で私の研究室宛にお手紙を頂戴したこともありましてし、生瀬先生ご自身も心配だろうと、法学部の学生の様子を報告しに、こちらからご自宅まで電話をかけることもありまして。体調の悪いときの電話はつらいのではないかと短く切ろうとするのですが、お声は元気でしたし、案件が複雑でつい少し話し込むこともありまして。

少しは大学に出てこられるようになってからは、また立ち話のみの交流になりましたが、たぶん調子もよくなかったのでしょうか、重い話も出てくるようになりました。しかし、私はそれを聞くに耐えられる人間的力量の持ち主ではなく、たぶん先生が求めていたようなお返事はできなかったと思います。

ただ、私のような、ほとんど成人になってから障害者になった者にとってさえ、メンタルヘルスを保つことは大変です。ましてや生瀬先生は、物心ついた頃から障害者であり、ご家庭にあったもろもろに対してご自身を責めておられました。私の眼からすれば、それは障害のせいであっても、もちろんご両親のせいではありませんし、ご自身を責めるべきことでもありません。これは事実なのだから、このように、はっきり言って差し上げればよかった。しかし、何回もそのことを伺いましたが、私は何も言えませんでした。いつも、私のような若輩者が口を出すべきかどうか逡巡して、結局、機会を逃しました。

そのような自責の念が先生を、人権委員会委員長として以上の仕事に駆り立てた一面は、あるかもしれません。本当は、人に依存する仕事の仕方は、組織としては原始的な段階を脱していません。そのことは先生もご存知で、自分がいなくなっても、いや、誰が担当しても、安定した出力を確保できる組織、そのような組織を望みながら、人権委員会委員長としてのお仕事をなさっておられました。

きっと、走り続けてこられた人生だったのだろうと思います。安らかに眠りください。